

津田昇平教話 第二四話

令和三年一月二四日 朝の教話

おごりがましいことをすな。ものは、細
うても長う続かねば繁盛でないぞ。

おはようございます。令和三年一月二十四日をお迎えさせて頂きました。

今日は、てんちかねのかみ天地金乃神様の月例祭がでございます。令和三年になって初めての、てんちかねのかみ天地金乃神様のお祭りになりますので、今年一年間の始まりの月、一月にあたって、ここまでおんれいの御礼はもとよりですけれども、また、このひと月間のことを、よくお礼申し上げ、またここからのお守りお導き、何より天地のお恵みを蒙かぶらせて頂けるように、お恵み頂けるように、また願わせて頂きたいと思えます。

そのてんちかねのかみ天地金乃神様が願われるのが、人間が人間らしく生きるということ

と。人間というのはどこまでも、弱い、至らない、行き届かない、そもそもがそういう存在ですので、それでいながら神様の子として、愛しくご慈愛じあいをもって注いで下さり、目に見える形でおかげも下さって、愛して下さる。そういう神様でございますから、その神様に、至らぬ人間としてでもお継すがりをしながら、お世話になりながら、お恵み頂きながら、ご厄介やっかいをおかけしながらでも、神様と共に生きる中で、一生をかけて神様から頂いているこの肉体と分け御霊みたま様を大切にしていく。肉体を使つて、たましいを磨みがいていく。本心の玉を磨いていく。そして死ぬ時に一番輝いた状態で、人生の中で一番清らかで、穢けがれなく、磨かれて、光を放っている。そういうおかげを蒙まうらせて頂きたいと思うんですね。そ

れを神様も願って下さいますし、そのために御道おみちの信心というものを授けて下さっているわけですね。

せっかく御神縁ごしんえんを頂いても、頂いた御神縁をしっかりと結んでいくってことはやっぱり大事なことで、「御神縁を頂く」ということと、「御神縁を結ぶ」というのは違うんですね。

例えばそうですね、両親が信心してるとか、人によっては、自分は教会の子弟だという方もいらっしやいますね。そうすると、生まれながらにして、金光教のことはまあ知っているとさえ知ってる。生活の中でね。時々お参りに行くんやとか、そもそも教会であつたら、生まれた時

から教会の子というふうに、神様とこの子ということになってくる。

ところが、何となしに繋がってるというのは、まあそれはそれで

御神縁ごしんえんは頂いてる。神様と自分との繋がりですよ。それは頂いてるんですけれども、主体的にそれをしっかりとこう意識して、固く結ぶということではできてるかということ、まあそうでもないですね。

だから、大きくなっていくにしたがって、頂いてた御神縁を手放したりとかね。信心しなくなったりということとは、もちろんよくあるわけですよ。それは教徒きとの家であろうとね。あるいは教会子弟に生まれても、もう信心しなくなって全く離れてしまうという場合だってやっぱりありますよね。残念なことですけど、やっぱりあります。

でも神様が願ってらっしゃるのは、御神縁を授けて下さった。後は、生きてる人間の方が神様と自分との縁をしっかりと結んでほしいということをお願いして下さるんですね。

もちろん関わる周りの方、親御さんやらね、おじいちゃんおばあちゃんやら、御霊様みたまやら、家族やらね、友人知人やら、あの手この手で、何とかしてこう御神縁がしっかりと結べるように、固くね。願って、あの手この手というふうにして繰り合わせて下さるもんなんですけれど、最終的には、いよいよのところは本人次第というところがありますね。

「これはうまいからしっかり食べなさい」って言うて、無理に口に運ばして食べさせることは、まあ少しはできますけど、でも大きくなって

まだらそれもできなくなりますね。

やっぱり最終的には本人がしっかりせんといけませんね。食わず嫌いっていうのはありますけど、「食べても美味おいしいのは分かってるけど、やっぱりいいわ」っていうふうな人だって、やっぱりあります。

でも、本当の神様のおかげを頂こうと思ったら、神様と自分との結び糸をしっかりとね、固く強くしていかなといかんのです。

教祖様のご理解で、有名なみ教えなんですけど、

おごりがましいことをすな。ものは、細うても長う続かねば繁盛はんじょうでないぞ。細い道でも、しだいに踏み広げて通ふ

るのは繁盛じゃ。道に草を生やすようなことをすな。

〔理Ⅰ 金光教祖御理解 八四〕

という理解があります。

「ものは細うても」ものっていうのは、どんなことでも「物事」ですね。物質の物ということではなくって、事柄とか物事っていうことですね。「おじりがましいらいよきをすな」「おじりがましい。おじりがましいっていこういじゅう」「おじら」っていっつのはなまもむいっつことかになつてきますけどね。普通に考えたら、いい気になることとかね、思い上がりとか付け上がるとか、そんな感じでしょう。ま、不遜ふそんになるんでし

ようね。勘違いしちゃったんでしょう。

どういう勘違いか。自分はもう大丈夫と思ったり、「自分はそんなに心配してもらわんでも、もう結構ですから」、なんぎ難儀になったりすると難儀になるような生き方になって難儀になるような心であったり性根しやうこんであったりするわけで、そういう生き方がね。だから、「自分はそこまでのことじゃないよ」と。自分のことはよく分かかってないわけです。だから一生懸命いっしょうけんめい生きてても上手くないかんかったり、がんば頑張ってるんやけどね。も、道からずれて難儀してしまったりということがある。

だから、ご信心頂いて、御神縁頂いて、ごしんえんご信心させて頂いて、ほんとに正しい生き方、この天地の間に生かされている人間としての正しい生

き方。おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいく。その一生の中で、正しい生き方というものがよく分かっているから、それをよくお参りしてお取次とりつぎを頂いて、話を聞いて、なるほどと合点がいった、合点がいったことを手本にして、よく手本を見ながらわが身わが一家を練習帳にお稽古けいこしていく。上手くできなくってもお稽古する。稽古していく中でだんだんと身に付いていく。身に付いていく中で、おかげを頂く器ができ、できた分だけ神様がおかげを注いであげることができまる。ってというのが本来ですね。

けれども、「おいらがまじい」ってこののは、しまりスタートしてないわけじゃなくて、スタートしていい気になるってことのは、ええ具合に

進んだんでしょ。ええ具合に進んだけれども、ええ具合に進んだ途端に「もうええか」と。「もう私、おかげ頂いたし」あるいは、「もう私大丈夫ですから。じゃあ、神様先生さようなら」っていう具合なんですよ。ずーっとが続かない。その時は一生懸命でやるんですけども途中で途絶えてしまう。緩ゆるんでしまう。御神縁を頂いたら、しっかりとことう結んで、きつく、固くしていかなといかんですけれど、結び目が緩いんでしょうね。ほどけてしまふんですよ。難儀でほどけるといふ場合もあります。あまりに難儀で。めぐりが断ち切ろうとしますからね、それに乗ってしまうということもある。けれど、おかげを授けて頂いて、頂いたおかげを大事にできずに、頂いたおかげで足を取られると言いま

すかね、引っ張られて。その結果、結んでた結び目がほどけて、緩んでほどけて、スルツと。

でも自分はっていうと、どっちにいるかって言ったら、おかげの方くっついていきますから、これでいいんですっていうようなもんなんですよ。神様とはもう繋がりがなくなりますね。結んでたものが離れるんですから。自分はっていうと、おかげを落とすとはあんま思っていない。だって自分はおかけ持つとるわけですから。

ところが、神様との繋がりが切れていくと、その自分が持つてるおかげも、だんだんおかげとして働かなくなる。むしろそれによっておかげも腐ってくるんですよ。腐ってきたらそら、生肉一つとってもそうです

よ。最初は新鮮なお肉で美味しそうって言うてても、神戸牛でもねえ、何でも。でも、ほっといたら、どないなりますか。そら異臭放ちますよ。悪臭になっていきます。衛生的にも悪いでしょうね。カビも生えて。それを吸い込んだり、食べたりしたらどないなるかって考えたら、それはどないなるや分かりやしませんわな。

神様と繋がっている間、しっかりと繋がっている間は、おかげはおかげとして生きてくるんですけれども、頂いたりしたのに切れていくと、離れていくと、その新鮮なおかげというものがだんだんと腐ってくるんですよね。それがまた、自分を苦しめることになる。「難なんはみかげ」ですけどね、みかげは難なんになっていくんですよ。これが怖いところだね、

人間の。信心が怖いんじゃないやなくて、神様が怖いんじゃないやなくて、人間のめぐり深さ、罪深さ、ええ加減さ、これが怖いですよね。

「細い道でも、しだいに踏み広げて通るのは繁盛である」「って仰ってますね。長く続かなかつたら、こら繁盛じゃないと。ゴールで言ったらさっきも言いましたけど、一生かけてなんですね。「死ぬ時に、一番道幅が広いのがいいよ」とよく言っんです、私ね。せっかくこの御道おみちと御神縁ごしんえん頂いて、おかげを頂けるだけ信心さしてもらった。でも、そこでまあ安心したんか油断したんかで、せっかく神様との繋つながりか、よくもうお参りしてね、自分と神様との間柄で、よくお参りしてたのに、その

道に草が生えてくる。お参りしないから。土やったら分かりますけど、よくずっと歩いてると、そこは草は生えないですよ。でも通らないでいくと、だんだん草が生えてくるんですよ。ほっといたら草がどんどん伸びてきて、もっとほっといたら、もう周りの草や木に埋もれてしまつて、道が消えちゃうんです。

そしたらなかなか元もとに戻れないですよ。その自分が踏み広げていた道。最初ようやく神様に繋がつながったと思って。その細い道でも、道が細いっていうことは自分と神様との繋がりが細いってことですよ。でも、繋がってないものが自分でしっかりと、本当の意味で繋がることのできたら、そこ、通り道になりますでしょう？

結局、その通り道を使って、神様がおかげを運んで下さるわけです。じゃ、道幅がそれこそ三十センチとかね、体を横にせんと通れないような道なのか、一メートル位の道なのか、二メートル位の道幅なのか。十メートル位の道幅なのか、五十メートル位の道幅なのか。これによって、例えば手に持ってね、運ぼうと思っても、体、三十センチ言うたらどないなりますかな。前には持てないですな。もうポケットに入れるしかしようがないでしょうね。でもこれがまあ、道幅が一メートル位になったら、そしたら運べるものも両手で持つことができるでしょうね。場合によったらリュックに背負うこともできるかもしれない。

でも道幅が、そうですね、二メートルとか、三メートルとかなったら

どうなりますかね。車で運べるようになりそうですね。二メートル位だったら軽トラックぐらいでも行くんじゃないですか？　じゃあこれ、五メートルとかになったらどうなりますか。トラックで運転もできそうですね。ドア開けても何とかなりそうですね。当たったりしないでしよう。大型トラックっていうふうにして考えてくるとね、やっぱりできるだけ広い幅の方が安心です。五十メートル位あったらどうなるかって言いましたら、道幅がですよ。そら、トラック何台も通れそうですね。細い川と、小川とね、一級河川のような大きい幅の川とやったら、流れる水の量は違うじゃないですか。おんなじことですよね。

つまり道幅が、自分と神様の間柄。その道幅が、自分がしっかりとお

参りして、ご祈念してお取次頂いて、その中で道幅ちのりっていろいろのは決まっ
てきますから、でも途中でやめたら、道は草が生えてきます。「コンクリ
ートっちゅうわけにいかんのですよね。」

じゃ、最初いっしょだけ一生懸命道幅広げてね、ようやく通って、ようやく
通ったから頑張がんばって道幅も広げたいやないか。一年、二年、三年かけて
とかね。「じゃ、その分だけ道幅も広いから、おかげも通れるなあ。は
い、おかげ授けてやろう。持って来たよ」「よかったよかった、嬉しいうれ
わ。もうこれでおかげ頂いたし、まあそんなに無理して参らんでも「っ
てなってきたら、そのうちだんだん草も生えてきて、草がまた草を呼ん
でね。気が付いたら通れなくなる。そうすると、いびっていつ時に、

「あ、神様をお願いしますよう。またお願いします」って言っても、まあなかなかそうはいきませんなあ。もう通れなくなっちゃうんですもんね。だから、「おごりがましいことをするな。思い上がるな。付け上がるな。勘違いするな。これでおかげ頂いてもう全然、あとは大丈夫と思ったらそれは違うんだよ」「ってことなんですよね。」「信心のはじめを忘れなよ」っていう教えを、だいぶ話をさしてもらいましたけど、これも繋がりますよね。」「ものは細くても」「ってありますけれど、最初は、だいたい皆一心になりますから、必死になってね。神様にほれ込んで信心しようと思っ、なる。で、おかげを頂ける。道幅もそれなりなんです。でも、だんだんとおかげ頂いていくと、信心が強うならんといかんの

に、弱くなってしまう。「もう大丈夫」と思い上がる、付け上がる、勘違いする。おごりがましいです。

そうなっていると、おかげを落としてしまうようになる。おかげを頂く前の自分のようなね、元の自分に戻ってしまうんですよ。それを仰るんですよね。そないならんようにしっかりと、死ぬ時に一番道幅が広がるように、よく考えて。百メートル走じゃなくて、マラソンですからね。死ぬ所がゴールなんです。そこまでちゃんと辿り着かんかったらあきませんわね。もうどんなに頑張ってもそろ、四十二、一九五キロ、言うたらこう、時間がかかってもいいからね。ちゃんとゴールせんとあきませんわね。

どんなにすごいハイペースであってもね。二百メートル三百メートルはすごい、一番早かった言うたかて、一キロのあたりでもう、脱落したんじゃねえ、棄権きけんとかっていうことにならんようにせんとあきません。ぼちぼちでもいいですから、少しずつ少しずつでも踏み広げてそして死ぬ時に、神様のところに行く時にね、その時に一番道幅が広くて、自分と神様との間柄も大きくて、神様のおかげをしっかりと頂けたり、いうようなね。またその道を、大事な方々に、周りの方に伝えて行くような、そのようなおかげをやっぱり頂きたいもんですね。

「信心のはじめを忘れない」ということと同じで、やっぱり、おいらがましいことにならんように、次第に踏み広げていく。そして、次第に

ですからね。急にとは仰らん。「にわかには広げて、草を生やすようなことをするな」っていうご理解があります。

今言ったのは、「金光教祖御理解」というところなんですけどね、

元々は、これは「尋求教語録」っていう、片岡次郎四郎の伝えのこ

なんですね。

これもここからスタートですから、一度ちよっと、ここもおんなじことですけど。言葉がちよっと違うんですよ。

「おごりがましきは久しからず。すべて、ものは細うても長う続かねば繁盛ではないぞ。細い道でも、しだいに

踏み広げてゆくのは繁盛じゃが、にわかには（※「急に」と

いうこと）広げて、道に草を生やすようなことをすな」

一理Ⅲ 尋求教語録じんきゅうきょうご 一四三より抜粋

この「にわかに広げて」っていうところがね、リアルですよ。私も

ね、なんでも、習い事一つとってもね、これって思ったら、パーツとや

るんですよ。パーツとやるんやけどね、一生懸命いっしょうけんめいやるんやけど、だか

らそんな時はそんな時なりになるんですけどね。でも続かんのですよね。

私、ほんまに続かん人間でね。唯一ひつ続いた人は信心だけです。いやほ

んまにね。だから良かったんでしょね。こんな言うたら、かっこい

いですねと思われそうやけどね。いやほんまに続かんくてね。何やってもこう、一生懸命やるしね。で、それなりにはなるんですけどね。ある日突然、プチンと切れるんでしょうね。性格もあるんかなあ。もう一生懸命やりすぎて、くたびれてプチンってなるような気がしますよ。

それでも切れずに続いてこれたのは本当に信心だけで、それは本当にありがたいことで、それがあれば後のことはくっついてくると思ったら、本当にありがたいことだね。でも自分の力だけっていうんじゃないくて、それは神様、御先祖様含めて、いろんな方々のお祈り添えを頂いて、何より神様が願って下さってね。そして、信心も繋いで頂いて、信心らせて頂いてるんやなと思うんです。

初めてお参りした人が信心熱心になって、でもほんとに信心にしっかりと繋がるっていうのには、私のやっぱりこう、お取次とりつぎさしてもらって来て、多くの人の。やっぱり経験で言うたら、この人本当に信心になつたなど。まあ「十年続いたら」って教祖様仰いますけど、ほんとに、あこの人は信心になったなと思うには、二回か三回位は切れますね。でも、氏子うじこからは切っとるんです、実際には。それを何とか、切らすな切らすな言われて、本人は切ったと思っても、こちらがもう祈り続けていくと、切れてるように思っても切れずにまた繋いで下さって、そう言う、もう切れたなって言うところが二回か三回くらい、そこを超えて初

めて本当の意味で繋がると思っんですよね。でもその祈りがこちらもずっと続いて、祈り続けんとあきません。でも、場合によってはそれ、十年ぐらいかかるねん。十年経ってまた繋がるとか。じゃ、その間十年間こちらはずっと、祈りを忘れたらいけませんわね。祈っとかんといかんのです。

祈っていく中で、十年続いて祈って、もう離れてって、「もう結構です」言うて。でもやっぱりおかげを頂いてもらわんといかんと思って、ぼちぼちでもやっぱり、祈り続けていく。それが続いていくとやっぱり十年くらい経った時、またふと、また戻って来たり、繋がったり。そこからもう一度信心するようになるよ、やっぱり最初の時とは違っんです

よ。

砂山みたいなもんでね。砂山を作って、そしてこう、手で上から潰つぶして広げてね、じゃ、土台が一回り大きくなりますね。上の部分の砂が下に落ちていきますから。そしてもう一度砂をかけて砂山を仕上げていくと、最初より一回り大きくなる。また手の平ですよ、てっぺんからグルグルと、言うたら円を描きながら潰してゆく。そうすると上の部分が下の土台に広がっていくから、土台が一回り大きくなる。それでまた砂山を作って仕上げていくと、もう一回り大きくなる。

やっぱりそんなもんでね。やっぱりこう、二回三回途切れてもおかしくないなあいうところを、やっぱり繋いで頂いて、これも信心してなん

て、偉そうにやっぱ言えなくてね。信心を繋いで頂いて、おさせて下さって、支えて下さって、導いて下さって。こっちが切っても切らずにね。あきらめずにね。

ま、こんな執念しつねんだと思います。人を助けようっていう、その執念です。神様の執念です。こっちもやっぱ執念ですよね。何の因果いんがか、執念みたいなもんでやりますよ。でもその中で、その人がまた、信心に本当の意味で繋がっていくところがありますね。まずそういうところがないといかんといい気がします。

そうやって神様に繋がっていったものが、急に広げたものがまた途中で「もう疲れたからやめる」っていうんじゃないかってね。「にわか

て、道に草を生やすようなことをすな」と仰いますけど、そないならんように、やっぱり、マラソンで、長くて、細く長くて。それを続けて、死ぬ時の、ゴールの時に、一番いい状態で終えさしてもらいたい。亡くなった時に神様に、こんくわだいじん金光大神様、御先祖様に、「ああ、ご苦労さん。ようやったね。おめでとう」って、言ってもらえるようなね。そんなおかげ頂きたいですよ。喜んで頂きたいもんです。一生懸命ずっとね。いくつ生きるか私たち分かりませんが、それが長い短いおまかせですけど、仮に今の時代、八十年、九十年位は生きること普通ですから、それぐらい生きた時に、「ああ、ようやったね、おめでとう。お疲れせん。ご苦労さん。万歳ばんざい」って、こっちも言えるように、言って頂けるよ

うに、喜んでもらえるように。そういう人生を歩ませて頂かなければいけないですよ。だっておかげ頂いてるんですからね。そういう信心を頂いてますから。それを大事にさしてもらわんといかんと思います。

ちなみにね、「じんぎゅうぎょうご尋求教語録」っていうかたおかじろうしろう片岡次郎四郎、のちに先生、

さいぎやう才崎金光大神こんこうたいしんになられましたけど、これ面白いのは、教祖様が仰った言葉ってというのがあって、そのあと、ひと言解説されるんですよ。これやったら面白いですよ。

「にわかを広げて、道に草を生やすようなことをすな」って。こゝまでは、カギカッコでね、金光様のお言葉ですよ。「とおっしやるの」って、片岡先生残しておられる。

とおっしゃるのに、わが心からとはいうものの、道を狭せばめて草を生やし、自分も人も通れぬようにする者がある。もったいないことじゃ。

〔理Ⅲ 尋求教語録 一四三後半抜粋〕

「道を狭せばめて草を生やし」、これ全部自分がってことを仰うつとるんでしようね。「わが心からとはいうものの」、自分がややつてることとはいいうものの、道を狭せばめて草を生なやしして、自分も人も通れんようにして、おままけに私が付け加えたら、「神様も通れんようにする者があるんやけけど、

何をやっとなや。こんなアホやないか」って。関西人でいうとね、

「アホちゃうか」って言いたくなりますわね。

「もったいないことじゃ」って仰ってます。ほんとにそうですね。せっかくおかげを通る道を用意して下さい、こちらこそそれなりに頑張がんばってね、自分も頑張って、そうして道を作ったのに、勿体ないですよ。せっかくのおかげの通り道なんですから。

おかげの通り道を、わざわざほったらかしにして。手入れ、それさえしてたら、あとずーっとおかげ色々頂けるんでしょう。でもそれがめんどくさいんでしょうかなあ。めんどくさいって言うて、ほんでまた苦労するんやからねえ。そないならんように、せっかく自分も頑張っておか

げ頂いて、道をつけて頂いたんですから、そのつけて頂いた道に草を生やすことがないように、自分も通れんようになったり、人も通らしてあげることができんようになったり、神様が通れんようになったり、つまりはおかげが通れんようなことにならんように、こんげつこんにち今月今日で信心をさせて頂きたいなと思いますね。

今日は今日で神様から新しい紙を頂いて、まっさらな状態ですから、良い一日が、終わる時にね、清書を提出しますから、そんな時に、「ああ結構やったな。ようお稽古けいこしたな」って言うてもらえるように、信心の稽古、

い、んはわが心、じんは神である。わが心が神に向かうの
を信心という。

【『天地は語る』九三より抜粋】

と仰いますから、心を神様に向けながら、いつでもどこでも何してて
も、神様と一緒に、嬉しい時も、^{うれ}疲れた時も、悲しい時も、楽しい時
も、「神様ありがとうございます」「神様お願いします」「神様疲れまし
たんで休まして下さい」「神様起きさめて頂いてありがとうございます
す」「いつも神様と仲良うして、^{こころ}心安うして、^{まごころ}そうして一日一日、その

時その時、神様のおかげを頂きながら過ごさして頂きたいなと思いま
す。それが道に草を生やさないために一番大事なことで、今できることで
すね。今しか生きることにはできませんので。

はい。今日は今日で上げを頂きましょう。よくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第二四話

令和三年一月二四日 朝の教話

令和五年七月十九日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五
